

年間を通じて受講者数は合計401名を数えている。平成8年度のコース修了時のアンケート調査によれば、コースに対する満足度を問う設問において満足したとの回答が64.4%、やや満足が28.8%との数字をみると、受講者の満足度はそれなりに満たせたと考える。しかしながら課題として今後取り組むべき問題点も生じている。

①アンケートに記入されたコメントの中に、合同講義と各演習との関連性がわからないという指摘が多く見受けられた。それぞれの合同講義の内容は、包括的なものなので、各演習との関連性をもたせることには無理があり、合同講義の内容だけを考えたコマの配置をしたものである。受講生の指摘の通りではあるが、むしろ演習で学ぶことの基礎の部分の知識としてとらえてほしいという要望を伝えていたつもりが十分に伝わっていなかったことに問題がある。

②当初予測していた福祉従事者の現任訓練としての受講者がかなり少なく、主婦層および退職後の男性の受講者が予想外に多くなっている。1994年度の受講者数に対する福祉従事者の割合は10.8%、1996年度は9.8%、1997年度は19.2%となっており、同じ講座で一般市民と専門職者が交流の機会を持ち、様々な形での協働へと展開して行くきっかけがつかれるのではないかという機能は今のところ果たせないでいる。福祉従事者、あるいは仕事を持つ人の本コース受講を阻んでいるのは、毎週3時間が24回続くというまさに体験学習のプロセスを生かすために設定している枠組みゆえとも考えられる。つまり、これだけの回数を継続できるのは、当該職員が受講している間に人のやりくりがつく恵まれた職場ということである。同時に、職員研修という形での受講の場合、コース修了後にはこのような知識や技能が身につくという具体性成果を求められることが多く、自己覚知の重要性は恐らく認識されながらも、そのための研修への出張が認められないのが現実である。これに関しては、福祉従事者へのアピールを、主に修了受講生の働きを通じて行くと同時に、受講のターゲットを地域活動や市民活動など様々なボランティア活動を行う一般市民へとシフトしていくことが考えられている。

③受講者の体験を素材として、対人間の相互作用

用によってすすめていく体験学習の方法は、本来の個人の変化や成長を導くものであるが、場合によっては、これらの体験が精神的、心理的な影響を個人に与えることも充分有り得る。現在までのところこうしたことで大きな問題はおこっていないが、コース内容の中には、「死の準備教育」の領域から援用して作成されたワークシートも含まれ、また受講生同士の関係が密接になってくると、ふりかえりやわかちあいのレベルで思わぬ外傷体験のフラッシュバックが起こらないとは限らない。特に阪神大震災以後、心的外傷を体験された受講者も多くおられるので、受講者の背景などを把握し、PTSDなどへの対応をも充分考慮する必要があるかと思われる。

④体験学習のプロセスがマイナスの影響を与えるのと反対に、クラスでの人間関係が受容的で暖かいものであるあまりに、そこに癒しを求めて参加する受講者が出る場合も有り得る。講座の場面ではなごやかに適応しているように見えても、日常生活場面ではむしろ不適応的、あるいはそこまできなくても講座での学びが意味をなしていない人が時として見受けられた。すでに述べて来たように、本コースのカリキュラム内容は積極的に自分についての問いかけを行うため、とくにアイデンティティに問題のある状態の人や時に実施することは危険である。必ずしも全ての人に適切な内容とは限らないという認識をもつ必要があるだろう。今後、一般市民層の受講者が増加することとも併せて、クラスの中での様々な体験を、受講者一人一人の職場や家庭、地域での日常の活動や生活のありかたと結び付けていくしなやかさを明確にしていく必要があるだろう。

II 社会福祉援助技術演習への応用可能性について

1. 演習の目的と現状

岡本(1995)は、社会福祉という現実的な実践や援助活動が不可欠の条件となる学問では、抽象化された理論をもう一度具象化して、現実のあれこれの社会福祉事象と具体的にかかわらせて理解し直す必要があり、そのために演習という教科を通して応用思考の基礎訓練を行い、応用動作の基